

○近年、異常気象が続く中、米の生産性向上(収量確保・1等米比率の向上)に向けて、総合的な「土づくり(圃場づくり)」の重要性が見直されています。

○農業機械を活用し、特に「土づくり(圃場づくり)」の重要な要素である「排水性・透水性の確保」と「稲わらの有効活用と作土深の確保」に有効な機械を紹介します。

【第1段階】 排水性・透水性の確保

<様々な排水対策機械>



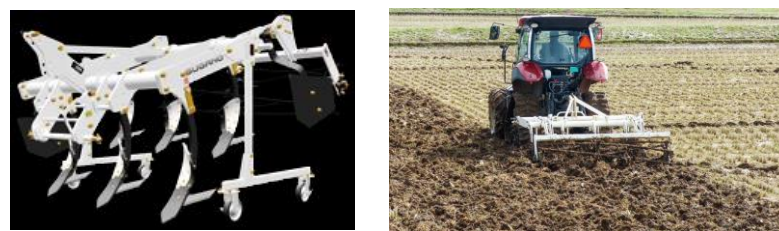
○水田の透・排水性を確保し、土壌を乾かすことで土中に酸素を供給し、微生物の活性化を促す。

○水をコントロールしやすい圃場を作り、酸素を含んだ水を供給することで根の活力が高まり、根腐れなど湿害防止の効果が見込める。

○作業深さ：30～45cm(暗渠機能の回復)

【第2段階】 稲わらの有効活用と作土深の確保

<「スタブルカルチ(一例)」による粗耕起作業>



○秋の粗耕起により、微生物による稲わら等の腐熟が促進され、「ケイ酸」等を有効活用することが可能。
(秋耕はメタンなど温室効果ガス削減にも繋がります)

○作業深さ10～30cmとロータリーよりも耕深15cmを確保しやすい。(根域が拡大し、根の活力が向上)

○作業速度が速い(4～7km/h)ため、忙しい秋でも「すき込み作業」が可能。

※「農業機械による「土づくり(圃場づくり)」で 収量アップ! 1等米比率向上!